

聖霊降臨後第17主日特定21 (10月1日の聖書箇所)

I 第一朗読 (エゼキエル18章1-4、25-32節)

1 主の言葉がわたしに臨んだ。 2 「お前たちがイスラエルの地で、このことわざを繰り返してにしているのはどういうことか。『先祖が酔いぶどうを食べれば子孫の歯が浮く』と。 3 わたしは生きている、と主なる神は言われる。 お前たちはイスラエルにおいて、このことわざを二度と口にするのではない。 4 すべての命はわたしのものである。 父の命も子の命も、同様にわたしのものである。 罪を犯した者、その人が死ぬ。

25 それなお前たちは、『主の道は正しくない』と言う。 聞け、イスラエルの家よ。 わたしの道が正しくないのか。 正しくないのは、お前たちの道ではないのか。 26 正しい人がその正しさから離れて不正を行い、そのゆえに死ぬなら、それは彼が行った不正のゆえに死ぬのである。 27 しかし、悪人が自分の行った悪から離れて正義と恵みの業を行うなら、彼は自分の命を救うことができる。 28 彼は悔い改めて、自分の行ったすべての背きから離れたのだから、必ず生きる。 死ぬことはない。 29 それなのにイスラエルの家は、『主の道は正しくない』と言う。 イスラエルの家よ、わたしの道が正しくないのか。 正しくないのは、お前たちの道ではないのか。 30 それゆえ、イスラエルの家よ。 わたしはお前たちひとりひとりをその道に従って裁く、と主なる神は言われる。 悔い改めて、お前たちのすべての背きから立ち帰れ。 罪がお前たちをつまずかせないようにせよ。 31 お前たちが犯したあらゆる背きを投げ捨てて、新しい心と新しい霊を造り出せ。 イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよいだろうか。 32 わたしはだれの死をも喜ばない。 お前たちは立ち帰って、生きよ」と主なる神は言われる。

II 第二朗読 (フィリピの信徒への手紙2章1-13節)

1 そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、*「霊」*による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、 2 同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください。 3 何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、 4 めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。 5 互いにこのことを心がけなさい。 それはキリスト・イエスにもみられるものです。

6 キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、 7 かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。 人間の姿で現れ、 8 へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。 9 このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。 10 こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、 11 すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

12 だから、わたしの愛する人たち、いつも従順であったように、わたしが共にいるときだけでなく、いない今はなおさら従順でいて、恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい。 13 あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです。 14 何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい。

Ⅲ福音 (マタイ 21章 28 - 32節)

28 「ところで、あなたたちはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄のところへ行き、『子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい』と言った。29 兄は『いやです』と答えたが、後で考え直して出かけた。30 弟のところへも行って、同じことを言うと、弟は『お父さん、承知しました』と答えたが、出かけなかった。31 この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。』彼らが「兄の方です」と言うとき、イエスは言われた。「はつきり言うておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。32 なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった。」

語句の解説

28節「あなたたちはどう思うか」。直訳「あなたがたにどんなものと思われるか」。ここでの「あなたがた」とは祭司長や民の長老たちのこと。今週の福音の直前で、神殿から商人を追い出したイエスに対して、彼らは「何の権威でこのようなことをしているのか」と詰問している。▼「兄のところへ行き」。

直訳「最初の者に近づいて」。直訳の「最初の者」は「兄」と訳するのが普通。しかし、二人の息子に父親が語りかけた順序を示しているにすぎないとすれば、「兄」でも、「弟」でもどちらでもよく、父親が話しかけた「最初の者」ということになる。▼「今日」。この語は直訳を見れば分かるように、「行きなさい」と「働きなさい」との間に置かれている。この語が「行きなさい」にかかっているとすれば、働くことよりも行くことに強調点があり、労働の質は不問にふされ、まず行くこと自体が求められている。29節では「彼は出かけた」とあるだけで、働いたとは言われてはいない。また、この語がここに置かれたのは、働き手をひとりでも多く必要とする「今日」だからかも知れないし、あるいはどの日も、考え直して態度を変えることのできる「今日」であることを示すためかも知れない。

29節「考え直して」。直訳「考えを変えて」。この語(メタメロマイ)はマタイ二七三「イエスを裏切ったユダは後悔し」では「後悔する」と訳されている。このようなことから分かるように、この語は「良心に呵責を感じ後悔する」という意味だが、神との関わりが意識されているわけではない。これに対して、「悔い改める(メタノエオー)」は「神の思いを知って、生き方そのものを変える」ことを意味する。2コリ七8-11についての「福音の言葉から」を参照。

30節「弟のところへも行って」。直訳「もう一人に近づいて」。28節の「最初の者」を「兄」と訳したので、この節での「もう一人」を「弟」と訳している。▼「お父さん、承知しました」。直訳「私は、主よ」。直訳を見れば分かるように、原文には動詞がない。しかし、文脈から考え、この息子はぶどう園に行くことを承諾したけれども「出かけなかった」者であるのは明らか。ここでの「私は」は「私は準備ができています」を短くした言い方かも知れない。また、「主よ」は「主イエス・キリスト」と述べるときの「主(キューリオス)」と同じ言葉である。この語は「目上の者への呼びかけ」として使うが、父親にこのような呼びかけを使うのは奇妙。「構成の解説」を参照。

- 28 「だがどんなものと あなたがたに 思われるか。 人が 持っていた 二人の子を。そして 近づいて **最初の者に** 彼が言った、『子よ、 行きなさい 今日 働きなさい ぶどう園の中で。』
29 だが彼は 答えて 言った、『私は望まない』**だが**後になって 考えを変えて 彼は出かけた。
30 だが近づいて もう一人に 彼は言った 同じように。だが彼は 答えて 言った、『私は、 主よ。』
そして 彼は出かけなかった。
31 誰が 二人のうちで おこなったか 父の望みを。彼らは言う、『最初の者』。
言う 彼らに イエスは、
「まことに 私は言う あなたがたに 次のことを 徴税人たちや 遊女たちは あなたがたの先に行く 神の国の中へ。なぜなら来た ヨハネが あなたがたのもとに 義の道の中で、そして あなたがたは信じなかった 彼を。
だが徴税人たちは そして 遊女たちは 信じた 彼を。だがあなたがたは 見て また考えを変えなかった 後になって 信じることに 彼を。」

31節「徴税人」。この語(テローネース)は「税金(テロス)を徴収する権利を買った(オーネオマイ)者」の意味。彼らはローマ帝国に差し出すと約束した税額以上の税を集め、その差額を自分の収入としていた。そこで不当に高い額の税金を集める傾向があり、民衆から嫌われていた。しかも徴税人がユダヤ人であれば、ローマへの協力者ということでもいっそう軽蔑されることになった。▼「あなたたちより先に神の国に入るだろう」。直訳「神の国の中へあなたがたの先に行く」。ここに使われた動詞「先に行く(プロアゴー)」は接頭辞プロ(前に・先に)と動詞アゴー(行く)の合成動詞。ここでは現在形だが、未来の代用としての現在形と解釈して、新共同訳は「先に…入るだろう」と訳している。徴税人や遊女は救いの使信を喜んで受け入れているが、祭司長や長老など指導者たちはイエスを排斥しようとしている。このような現在の態度によってそれぞれの将来の姿が決まる。徴税人や遊女はイエスを受け入れたので、神の国へ指導者よりも「先に行く」という未来を確実にしている。この確実さを表すために、「先に行く」を現在形にしているのかも知れない。徴税人や遊女が先になるということはそれほど確実な未来である。また、ここでの「彼らがあなたがたの先に行く」は、「あなたがたではなく彼らが行く」の意味だと考える学者もいる。なお、マタイは「神の国」とは呼ばずに、「天の国」と表現するのが普通ですが、ここでは例外的に「神の国」を用いている。

32節「義の道を示した」。直訳「義の道の中で」。「道(ホドス)」は「生き方」を表す。洗礼者ヨハネは「義」という「生き方の中で」人々のもとに來た。義とは、神と人との間に見られる相互愛に対して、互いに忠実であることを指す。ここでは神の義というよりは、人が歩むべき道のことである。▼「信じた」。洗礼者ヨハネが信仰対象のように描かれているのは、マタイでは洗礼者ヨハネはイエスと同じ使信を述べており、彼とイエスとを重ね合わせる事ができるからだ。たとえば、洗礼者ヨハネが荒野に現れて告知した言葉は「悔い改めよ。天の国は近づいた」であるが(三三)、宣教を開始するイエスの第一声も「悔い改めよ。天の国は近づいた」であり(四一七)、まったく同じ。洗礼者ヨハネを信じない者は、イエスを信じることがない。▼「それを見ても」。直訳「見て」。原文は何を見るのか、その対象を書かないが、文脈から考え、徴税人や遊女がヨハネを信じたことである。彼らはそれを見ても、まだ「考え直す」ことをしなかった。

①構成の解説。今週の福音は、たとえを述べる第一段落(28—31節前半)とそのたとえに基づく教えを述べる第二段落(31節後半—32節)に分けることができる。

第一段落(28—31 a)。今週の福音の前には、神殿から商人を追い出したイエスに、「何の権威でそのようなことを行うのか」と問いつめる祭司長や長老たちが登場していた。イエスは巧みに応答して、彼らの問いに直接に答えることを拒んでいる。今週の福音はそれに続いて、イエスは「だがどんなものとあなたがたに思われるか」と祭司長や長老たちに再び問いかける。この問いによって、イエスは一度は拒んだ彼らの問いに暗に答え始める。今週の福音はイエスの持つ権威についての教えでもある。この問いのあとに、「二人の息子」のたとえが続く。ぶどう園に行つて、働きなさいという父親の願いに対する二人の息子の応答は対照的である。最初の息子は

彼は答えて言った

「私は望まない」。

後になって考えを変えて

出かけた。

と述べられているが、もう一人の息子については

だが彼は答えて言った

「私は、主よ」。

そして彼は出かけなかった

と述べられている。一人は考え直して「出かけた」のであり、もう一人は結局「出かけなかつ

た」のだから、二人の応答が対照的なのは明らかである。だから、「私は、主よ」は、最初の息子の「私は望まない」とは正反対のことを指しており、共同訳が「お父さん、承知しました」と訳しているとおり、父の願いの承諾を表しているであろう。

しかし、我々に奇妙に思えることは傍線で示したように、「そして彼は出かけなかった」と述べていることである。この息子は父への応答とは違って、ぶどう園には行かなかったのだから、「だが出かけなかった」とすべきだが、「そして」を用いている。確かにギリシア語の「そして(カイ)」は文脈によっては「だが」の意味になるが、最初の息子の描写には「だが」を使っているから、ここでの「そして」はやはり奇妙である。

そこで次のような説明が可能かも知れない。与えられた指示を実行したいと頭では考えているが、実際には実行しないということとは人間によくあることである。それが習性といえるほどに、身に染み込んでいると言えないこともない。だから、習性を抑えて「出かけた」となるためには、「だが後になって考えを変えて」ということが不可欠であり、それを欠くなら、習性のまま「そして出かけなかった」で終わる。祭司長や長老たちは神の指示に従いたいと思ひ、口では「私は、主よ」と答えるが、神の指示を完全には果たすことができない人間の有様を無視しているから、結局は習性に押し流されて、不実行で終わる。だから、神の指示を実行できないことを熟知する者のほうが、かえって神の国に近いことになる。

第二段落(31b-32節)。イエスは徴税人や遊女のほうが祭司長や長老たちよりも先に神の国に行くこと述べてから、「なぜなら」で始まる32節でその理由を明らかにしている。祭司長や長老たちは弟(「もう一人」)のようである。なぜなら、律法を守っていると自負しているけれど、洗礼者ヨハネが義の道を示したときに、それを信じなかった。しかし、律法を守りきれなかった徴税人や遊女はかえって信じたことになった。しかも、徴税人や遊女が信じたのを見ても、祭司長や長老たちは「後になって考えを変えなかった」から、彼らよりも後の者になってしまった。

②注目すべき言葉「後になって(ヒュステロン)」と「心を変える(メタメロマイ)」
「後になって(ヒュステロン)」

この語は、形容詞ヒュステロス(後の・後者の)の中性形で、副詞として用いられる。新約聖書の用例12回のうち、マタイ福音書に最も多く、7回現れる。

⑦形容詞として。

比較級の意味で、「二番目の・後者の」。今週の福音の29-31節には、別の読み方をする写本がある。それによると、「兄は『行く』と言って、出かけず、弟は『いやです』と言い、あとから出かけた」という描写になっている。ちなみに、協会訳聖書はこの異説を採用している。従ってこの異説では、父の望みどおり行動したのは「後者(弟)」の方である。この異説では31節に、この語が用いられている。

最上級の意味で「最後の」。1テモ四1は「終わりの時」には、惑わす霊と、悪霊どもの教えとに心を奪われ、信仰から脱落する者がいると、背教を予告する。

⑧中性形で、副詞として。

比較級の意味で、「第二に・後に・その後」。イエスは荒野に行き、四十日間、昼も夜も断食し、「その後」空腹を覚えた(マタ四2)。復活のイエスは二人の弟子に現れ、「その後」、十一人に現れて、イエスの復活を信じなかったことをとがめる(マコ一六14)。死を目前にしたイエスは、ペトロに「後でついて来ることになる」と答える(ヨハ一三88)。鍛錬は当座は悲しいものと思われるが、「後になると」義という平和に満ちた実を、鍛えられた人々に結ばせる(ヘブ一二11)。今週の福音では、ぶどう園へ行き、働きなさいという父の命令に、最初は背いた兄が「後で」考え直して出かける(29節)。但し、88節にこの語を置く異説もある。イエスは、このたとえを聞いている祭司長や長老たちは「後で」考え直して洗礼者ヨハネを信じようとしなかった、と非難する(32節)。

油を買いに出ている間に花婿が来て、戸を閉められてしまった愚かな乙女は、「その後で」主人を呼んでも、知らないのと突き放される(マタ二五11)。

最上級の意味で、「最後に」。ぶどう園を貸した主人は、自分の息子なら敬ってくれるだろうと、「最後に」息子を送り(マタ二一37)、イエスの裁判では、「最後に」来た二人の者が、イエスは神殿を冒瀆したと証言する(二六60)。サドカイ派の人々は、七人の兄弟と結婚して、「最後に」死んだ彼らの妻は、復活の時、誰の妻になるのか、と尋ねて、イエスを試す(マタ二二27並行)。

「心を変える(メタメロマイ)」

新約聖書の用例は6回。「悔やむ・後悔する」を意味する。動詞メタノエオー(回心する・悔い改める)は、心を変えることを意味するが、この語はむしろ感情の変化を表す。しかし、メタノエオーも、これまでの誤りに気づいて考えを変える場合には「悔いる・後悔する」を意味するが、この語も、用例によっては「考えを変える」の意味になる。

今週の福音では、父の命令に背いた兄は、後で「考え直して」出かける(29節)。30節にこの語を置く異読もある(前項「後になって」(ヒュステロン)参照)。イエスは「二人の息子」のたとえを話した後、後で「考え直して」洗礼者ヨハネを信じなかった祭司長や長老たちより、徴税人や娼婦たちの方が、先に神の国に入ると言う(32節)。この二例は、「後悔した」の意味にも、単に「考えを変える」の意味にも取れる。

イエスを裏切ったユダは、イエスに有罪の判決が下ったのを知って「後悔した」(マタ二七3)。祭司はレビ族から出るとされているのに、ユダ族出身のイエスが祭司となったのは、神の誓いによつていと、ヘブライ書の著者は主張する。イエスを誓いによつて祭司とした神は、「その御心を変えられることはない」(ヘブ七21)。

パウロは、コリント教会に「あの手紙によつてあなたがたを悲しませたとしても、わたしは後悔しません」と書き送り、「たとえ後悔したとしても」今は喜んでいてもパウロは述べている(2コリ七8)。それは、コリントの信徒がただ悲しんだからではなく、悲しんで悔い改めたからである。2コリ七9の「悔い改めた」にはメタノエオーの名詞形メタノイアが用いられており、七10の「悔い改め」もメタノイアである。パウロはこの箇所、メタメロマイとメタノイアを使い分けている。

③今週の福音は、イエスの権威についての問答の後に置かれている。祭司長や長老たちは、権威の源泉を律法という言葉に置いているが、イエスは権威の源泉を言葉には置いていない。イエスは何を通して権威を示しているのか、それが今週の福音のテーマである。

そして、出かけなかった(28—31 a節)

イエスは「あなたがた」に語りかけているが、この「あなたがた」は文脈からみて、祭司長や長老たちである。だから、イエスが「二人の息子」のたとえを語ったとき、彼らのことがイエスの念頭にあったと思われる。

祭司長や長老たちは神の指示をきちっと守るエリートだと自負している。たとえに登場する弟は父に答えて「お父さん、承知しました」と述べており、この弟は彼らの姿を示している。「お父さん、承知しました」を直訳すると、「私は(準備できています)、主よ」となる。「私は準備できています」と胸を張り、父親に「主」という尊敬語を使うところに、彼らの意気込みが現れている。父の指示に従いたいという意気込みは持っているが、結局は完全には実行できず、「そして出かけなかった」ということになる。神の指示を、神が望むように完全に果たすことは人間にはきわめて難しいことである。

一方、たとえに登場する兄は、祭司長たちによつて律法を果たしていないと軽蔑されていた徴税人や娼婦を指している。徴税人や娼婦は神の指示を果たせない自分でしかないことを知っているが、そのことに痛みを覚えている。だから、「後で考え直す」ことができ、「出かける」ことになった。「考え直す」と訳された言葉は「良心に呵責を感じ後悔する」ことを表す(「語

句の解説」を参照)。神の指示を果たせると過信していた祭司長や長老たちは、かえって指示に従うことができず、むしろ果たせないことを知り抜いていた徴税人や娼婦が神の指示に従うことになる。

徴税人や娼婦のほうに先に (31b-32節)

「神の国」に先に入るのは、律法を果たせると自負していた祭司長や長老たちではなく、彼らが軽蔑していた徴税人や娼婦のほうだ、とイエスは説く。なぜなら、義の道を示した洗礼者ヨハネを信じたのは、彼らではなく、徴税人や娼婦だったからである。神が求めているのは、自力で義を行うことではなく、義を示した方を「信じる」ことである。この信仰が義の道へと人を招き、それを行う力を与える。しかし、自力に頼る祭司長や長老たちは、洗礼者ヨハネを信じようとせず、しかも信じた徴税人や娼婦を見ても、「後で考え直す」ことなく、信じようとはしなかったのである。彼らにも「後で考え直す」機会がまだ与えられている。考え直すなら、忌まわしい過去も救いのための前史に変わる。

今週の福音のまとめ

祭司長や長老は権威の源泉を律法の言葉に置いた。イエスは権威がどこから来るのか直接には答えようとはしない。むしろ、イエスに出会った者が「考え直して」義の道を信じたことに権威が示されていると考えている。真の権威は、それに応じた行為を呼び起こすからである。